

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル 電話(03)3337714649

FAX(03)329915367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額700円 6ヵ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

フクシマの現実に寄りそい考えよう

あいざわ 一正……………2

原発は、電力会社の経営ではなくいのちの問題

食糧難克服 市民の暮らし表情に余裕も

小林 義昭……………3

―朝鮮民主主義共和国を訪ねて―

伊藤誠著『日本経済はなぜ衰退したのか』をどう読むか 野崎 佳伸……………5

政治、社会改革に哲学必要……………7

―小森龍邦氏(元衆院議員) 日本の政治を語る―

自民大勝 しかし参院過半数に届かず……………10

―脱原発候補 東京で山本太郎氏当選―

事業は拡大、表情に自信と明るさ……………11

―二元国労働争団を訪ねる旅― 彌次喜多道中(二)―

読者からのおたより……………13

お知らせ

次号No.1150号(八月一五日発行)は発送日を早め、八月三日局出し予定です。

刊 旬 社 会 通 信

NO. 1149 二〇一三年八月一日号

二〇一三年八月一日発行
(毎月二日、一五日二回発行)

フクシマの現実に取りそい考えよう

— 原発は、電力会社の経営ではなくいのちの問題 —

福島第1原発事故は、過酷事故は起こること、放射能汚染と放射線被ばくはとてつもない影響を人間と社会に与えること、を明らかにした。

大地の汚染は住めない土地、農業生産のできない土地を生み出し、海洋の汚染は水産業を制限する海にしてしまい、家族を離散させ、コミュニティを崩壊させ、そこにあった歴史と文化を奪い去り、被ばくによる健康被害とも相まって人格権の侵害をもたらしている。

その後月日が経過するなかで、あらわになってきたことは国家による「棄民」という事態である。情報の秘匿・後出し、汚染・被ばくの過小評価に始まったそれは、元の生活に戻りたいという被災住民の願いを踏みにじり、高線量域への帰還を促して損害賠償を値切り、職を失った人々を使い捨ての被ばく労働に追い立てているのである。

このような事態を二度と現出させてはならない、東海第2原発の過酷事故を発端とするこのような事態を引き起こしてはならないとの願いは地域住民の誰もが持つ。

そして東海第2原発は福島第一原発と同様、現行の立地審査指針や様々な設計基準を満たしているとして設置・稼働が許可されてきた。

原子炉も炉心も、格納容器・大口径の配管もそれらの基準を満たすものとしてあったのである。しかし過酷事故が起こってしまったことはそれらの基準自体が不適切だったことを証明した。

基準が不適切であればそれによって許可された原子炉も格納容器も、その他もろもろも安全性を担保するものとは言えないということであり、別のものに取り換えなければならぬ事態が起こったということだ。

原子炉も格納容器も取り換えられない。それが取り替えられない以上、廃炉にするしか選択の余地は無いはずなのである。

七月八日、新規制基準が施行され、経営問題を理由に電力会社は再稼働の申請を始めた。新基準の対象は原子炉の基本構造部分はそのままに、何らかの補強がなされたに過ぎない原子炉施設だ。そして事故で否定された旧基準と決定的に違うのは過酷事故対策（重大事故と称している）を追加していることだが、裏を返せば過酷事故は起こるとの前提に立つ基準だということだ。

過酷事故は起こる、とは過度の被曝と放射能汚染を認めることに他ならない。それらを防ぐというこれまでの基準からすれば天と地ほどの違いである。そのような被曝と汚染を前提としてまで原発を設置すべきなのかどうかは、本来国民的議論を尽くすべき課題であると考ええる。

事故の収束も見えていない中で、原子力規制委員会は再稼働を急ぐ電力会社に呼応す

るのではなく、今こそその議論を始めるべきであろう。たかが電力会社の経営問題のために、全てのいのちが犠牲になっていいはずはないのである。

(茨城県東海村 村議会議員 あいざわ 一正)

食糧難克服 市民の暮らし表情に余裕も

―朝鮮民主主義共和国を訪ねて―

四回目の訪朝

六月一日〜六月六日に米山昇県会議員と朝鮮民主主義人民共和国(朝鮮)を訪問する機会をいただいた。

私は、四回目の訪問となる。七九年の新潟県日朝県民会議の代表団として(七六年の「ポプラ事件」の直後)、二〇〇〇年の日朝友好促進新潟市議会議員連盟(市議七名・一九八〇年代後半〜九〇年代の社会主義共同体の崩壊と大水害・二〇〇〇年のキム・デジュンとの南北首脳会談)、〇三年のマンギョンボン号での米支援団(〇二年の小泉訪朝と拉致問題)である。

新潟市は、かつて帰国船の出航地であり、その後マンギョンボン号がウオンサン市間を往来していた。市民の間でも「穏やかな友好意識」があり、前市長までは訪朝して国際交流していた。

目的

〇二年の小泉訪朝により「拉致問題」が明らかになり、県内には特定失踪者と言われる方も含めて関係者がおられる。〇二年を契機に「穏やかな友好意識」が「朝鮮敵視・バッシング」の震源地となり、県内の友好組織も活動を停止した。〇七年にエリナの三村光弘氏招いての講演会が数年ぶりの対外的な活動となった。

私たちは、県内の友好組織の再建に向けて昨年夏から意見交換をし、年内に発足させたいと準備を進めている。

私の訪朝目的は、①日朝両国間の懸案解決には話し合いの再開が必要であるが、敵対的・膠着関係にあり、地方から交流を再開することで国家間の雪解けの一助になればと考える。②秋に〇五年以来途絶えている県内訪朝むけて対文協との交流・人的つながりを作る。③〇三年の訪朝後の変化、特に食糧問題を含めた国民生活の状況や緑の復活状況。④停戦協定破棄後のパンムンジヨムの緊張状況・ケソンの工業団地の状況。⑤拉致問題での新潟市における雰囲気(以前に比べ落ち着いている)など、である。

一日にピョンヤン空港に対文協のソンさん、キムさんの出迎えを受けて、車でピョンヤン市内に移動した。

印象

車中からの見た印象(〇三年訪朝に比して)は、緑が豊かになり、田園地帯が田植えて活気に満ちていた。市民の衣服もカラフルになり、表情に余裕が感じられた。

一時の食糧難を克服し、顔が少しふっくらしているように思われた。ホテルの食事も消費文化の資本主義国とは比べられないが、朝食がバイキングになり、生野菜も出され、食糧事情が改善していることを実感できた。市内は高層住宅が多くなり、柳京ホテルが目立たなくなっていた。一〇年ぶりに訪れたピョンヤン市は様変わりをしていった。

私は街や市民の様子を新潟の川村邦彦さんに伝えたく携帯をとりだしたが、残念ながら使えなかった。

川村邦彦さん

県内には帰国協力事業をはじめ朝鮮との友好を進めた偉大な先輩が多数おられる。川村さんは九七年から水害・干ばつに遭遇した朝鮮にマンギョンボン号に米を積み込み、ウオンサン市の子どもたちを中心に訪朝支援をしていた。〇二年に拉致問題が明らかになり、大半の人が朝鮮友好運動から離れるなかで、マンギョンボン号が止まるまで毎年援助を続けていた。

私も〇三年に川村さんと支援米をマンギョンボン号に載せて訪朝したが、右翼から脅しの電話や帰国後三ヶ月余りも真夜中に無言電話が続いた。中心の川村さんへの嫌がらせは、私と比べようもない。川村さんは、私の尊敬する先輩であり、私も「困った時の友が真の友である」という生き様を歩み続けたいと思う。

変化

停戦協定が破棄されてもピョンヤン市民に緊張状態を感じられなかった。毎回パシムンジョムで南北の緊張状態を測ることができ、南北融和が進められていた〇三年に比べても思ったほど緊張していなかった。

対文協の皆さんが新潟に期待していること、ケソン工業団地のことなど相当忌憚なく意見交換できる人間関係が作れたこと、メールで連絡を取り合える関係も作ることができた。

帰国後一ヶ月以上経つが朝鮮のことを聞かせて欲しいと多くの方から言われたが、抗議の電話も苦情もなく、前回訪朝と様変わりである。「制裁一辺倒」の政府の方針では何も解決できないことを国民が感じ始めているのでないか。

目標

緊張の中にも楽しい訪朝であり、所定の目的もほぼ達成できた。六日間、朝から夜遅くまで私たちの面倒を見ていただいた対文協のソンさん・キムさんと訪朝の労をとっていただいた朝鮮総連関係者に感謝を申し上げる。

今年中に友好組織の再建と秋に訪朝団を実現したいと考えている。

(新潟市議会議員 小林 義昭)

伊藤誠著『日本経済はなぜ衰退したのか』をどう読むか

一

本誌No.1147（本年七月一日号）に掲載された、稲村守さんによる書評には重大な誤解があるようですので、恐れながら進言します。

稲村さんはこの稿の中で伊藤誠東大名誉教授の名著『日本経済はなぜ衰退したのか』について、「(新社会) 党を理論的かつ実践的に死に至らしめるもの」とし、「宇野理論との決別を」と結論される。その理由は大きく、ふたつあって、一つは伊藤氏の理論、特にその恐慌論が宇野弘蔵氏のそれに立脚するものであること、二つには伊藤氏が、21世紀型社会民主主義の構想と実現をめざす具体的提言をされていることについて、「それは実践的には科学的社会主義を掲げず、社民主義の政党への合流の道となろう。」と危惧されることにある。

メモ的なものではありませんが、一読して「俺のとは違うな」と感じ、本誌のためにも異なる意見もあることを知っていただきたく、こちらにもメモ的に寄稿します。それ以外にもいくつか誤読・誤解が目につきますが、省略します。

二

まず宇野恐慌論について。資本主義が本来、商品ではない労働力を「商品化」しなければ成り立たないこと、しかし労働力は資本が直接、生産できるものではないこと、ゆえに資本主義は独自の人口法則をもってこの問題を「解決」しようとする。これらはマルクスがはじめて明らかにしたことです。マルクスはこれらの立論の上に、彼の恐慌論を資本論の中に散りばめています。彼の死が特にその第三巻を完成させる時間を奪ってしまったこともあり、マルクスの恐慌論をさまざまに解釈させる余地を残しました。宇野恐慌論は中でも、第三巻三篇第15章第三節「人口の過剰における資本の過剰」（岩波文庫版第六分冊）の記述にある「資本の絶対的過剰」に着目し、それを重視して成り立っています。

稲村さんが「日本経団連会長が読んだら喜びそうな：隠しておきたいような内容」と揶揄する「賃金の上昇が一般的利潤率をはなはだしくかつ突然低下させる」恐慌の可能性については、マルクス自身が論及しているのですから、稲村さんは宇野恐慌論を揶揄することをおして、結局はマルクスをも揶揄することになっています。なお、宇野恐慌論と資本論の関係について、詳しくは岩波文庫版『恐慌論』巻末の伊藤誠氏の解説を参照して下さい（このたび宇野の本文ともども英訳される運びになったと聞き及びました。ご同慶の至り）。

なお私は「賃金上昇圧力を主因とする」恐慌論について、これは労働者サイドからみれば、共産党宣言の有名な一句をもじって、「ときどき労賃は上昇するが、それはほんの一時的にすぎない」と読み替えています。最終的には資本主義社会を止揚するのではなく、労働者は何度でも恐慌に伴う大失業の苦しみを味わうことになるからで、宇野恐慌論もそのことを十分、含意していると理解しています。稲村さんも宇野恐慌論をこのように読みかえれば、腹立ちも半減すると思います。

ついでながら、マルクスの賃金闘争論について、後段の議論とも関係しますので私見を述べます。マルクスは第一インタナショナル評議会での講演（一八六五。のちに『賃金・価格・利潤』として出版）をしめくくるにあたり、当時の労働者の賃金闘争に関して、「もし資本との日常闘争で臆病にも屈服するならば、彼らは、そもそももつと大きな運動をおこすことなど、とうていできなくなることはまちがいない。それと同時に：かれらはその旗に「賃金制度の廃止！」という革命的な合言葉を書き記すべきである」（『国民文庫版訳』）と述べています。

なお、この発言はマルクスが、当時、共産主義革命の到来は比較的すみやかに可能になるものと想定していた下でのものですが、それは置いて。この改良と革命の弁証法についてのマルクスの言は、永らく私の座右の銘となっています。無論、今の春闘でいつでもどこでも「賃金制度の廃止！」を掲げよと主張するものではありません。革命と改良の弁証法は時々改良主義者の詭弁にもなり、また英雄主義者の空文句にもなり得ます。

なお、宇野理論の『二段階論』からして国家論が不在」と言われることについても異論がありますが、内容不明でもあり、今回はタッチしません。

三

ふたつ目の問題については、まず稲村さんの言う「新社会党はなぜ衰退したのか」と読める、というよりもっと広く、ソ連・東欧崩壊以降、社会主義の陣営が世界的にも閉塞感に満ち、二〇年以上にもわたって克服できていないのは何故か、という問題意識については共有できると思います。伊藤氏はその上で、21世紀型の社会民主主義と社会主義にとつての戦略課題のうち（稲村さんは紹介していませんが）、現に検討されている事例として①グリーン・リカバリー戦略、②ベーシック・インカム（BI）構想、③地域通貨の理念と実践、を具体的に取り上げています。実はこれらの問題は欧米マルクス系学者や民衆運動が早くから視野に入れ、多くは日本よりずっと進んだ形で議論が深められてきています。世界的マルクス経済学者として、諸外国の学者とも親交の深い伊藤氏ならではの問題意識であると思います。そして、BIについては新社会党の活動家の中でも既に真剣な議論がされてきています。

さて、こうした改良的課題について検討をすることがなぜさまざま「社民主義政党への合流の道」という話になるのでしょうか（ご安心下さい。私は新社会党と社民党との合流については先頭に立って反対する所存です）。最終的に党の政策として採用するかどうか、賛否の議論はいろいろあつて良いと思いますが、ハナから無視してかかるという態度はいかなるものか。こうした民主主義的課題について、全く問題にしないというのでは、これら諸問題を真剣に議論している世界のマルクス派や広範な民衆運動にとつて、日本の労農派は永遠に不要な存在であり続けるでしょう。山川・向坂代表時代にあつても、様々な改良的課題を労農派は理論的にも担ってきました。まさか、「資本主義的改良」なら口にして良いが、「社会民主主義的改良」はダメ、ということにはなりませんまい。不肖〓私にとつて、現在の主要な問題意識の一つに、各種の「格差是正」があります。当面、社会主義革命によつてただちに解決しえないとす

れば、たとえ資本主義の改良の枠内であっても、それをステップとして社会主義への共感が生まれるような改良政策を、新社会党は早急に示すべきだと考えています（稲村さんのお力も借りたものです）。伊藤氏は同様の問題提起をされているわけです。「社会主義にならなければ本質的には何も解決しない」と超然とし、結果として何もしないでいるものに、誰が期待を寄せるでしょうか？それこそ「労農派はなぜ消滅したのか」と、後代に問われる事態となりかねません。

我々が今日、最も主要な敵とすべきは、資本主義的各種イデオロギーの中でも「新自由主義」にあることは明らかです。新社会党や新・社会主義協会はその誕生の時から、新自由主義に狙いを定めてきたし、他の日本の左翼政党・グループに先駆けて警鐘を鳴らしてきました。これは我々の誇りとするとありますが、それから数えても一五年が経ち、大きな成果を挙げるに至っていません。

伊藤氏の新著（平凡社新書 七八〇円）は、氏としては初めての新書版出版でもあり求めやすく、かつ5つの章に分かたれていて、学習会にも向いています。稲村さんの言うように「宇野氏以上の難解な文章」では全くありません。稲村さんほどの読書家からなぜこのような読後感がでてるのか、不思議でなりませんし、少なくとも資本論より、はるかに読みやすいものです。本誌読者のみなさんはぜひ書店または図書館で手にしてみてください。以上、恐々謹言。（野崎 佳伸）

政治、社会改革に哲学必要

—小森 龍邦氏（元衆議院議員）、日本の政治を語る—

運動経歴は労働運動のど真ん中での経験はない。側面から自治労、日教組と連携を取り、人間の尊厳をめざして、部落解放運動を進めた。部落解放運動では変革期の一翼を担った自負はある。

小選挙区制 政治は、トリックが多い。小選挙区制もそうだ。社会党も勢力があったが、政治、経済に対する思想、理論がなかったのでやられた。今回の選挙（十二年十二月衆院選）で、自民は、思ったような数を取ったが、自民党が信頼されていると思っただけで、自民党自身が言っている。国民が支持しただけの議席が国会で配分される選挙制度を作らなければならない。民主党も含め極端に政権が移っていく選挙制度を作った。中選挙区なら支持した通りの議席が取れる。

議員時代、狭山裁判の論陣を張りたいと思ひ、法務委員会に籍を置いていた。冤罪を許すという事は日本の民主主義の政治的な欠陥。早くから社会党の法務委員会の筆頭理事になった。筆頭理事は国会対策委員会に出る立場にあり、早くから対策委員会に出ていた。村山さんは小選挙区を飲まされた。小選挙区になって民主勢力が弱くなり、労働組合の大幹部は敵に歩調を合わせるによりまずまずの人間関係は保てたかもしれないが、日本の労働運動全体は力が小さくなった。部落解放同盟もそうだ。

わが国の政策決定に対し、どういう階層が、どのくらいの影響力を持っているかという事を調べた結果がある。部落解放はかなりの影響力があると週刊誌に出ているが、

小選挙区制で部落解放同盟の幹部も自民党に媚を売って、その場その場の存在意義を末端の部落解放同盟員に見せつける。その芝居をするために汲々としている。

小選挙区を決めるとき委員長から書記長である私に電話が来た。小選挙区制に賛成を入れてくれという事だった。これは各労働組合のトップクラスの所にも工作されていたはず。小選挙区比例代表という制度はマイノリティの権利を蹴散らかしていく選挙制度。我々がマイノリティの運動をしているのを忘れているのかと言った。

思想不足 困ったと言ったので解放同盟の中央執行部が困ったというのであれば、私が書記長でいることが困った存在だろうから、私は、辞表を出しましょうと決意した。書記長が小選挙区に反対するという事になれば、同盟全体が、支配者階級から白い目で見られるという事を考えたのでしよう。それで辞表を出した。

自分が思わざることを同盟の中央執行委員会で決められ、各種大会で書記長が報告し返答しなければならぬ。気持ちにあわないことは返答できない。日本の大労働組合の幹部、民主団体の幹部、同盟の幹部はそのところが分からなかった。思想不足だった。政治、経済学の学識がなかった。情けない限り。どんどん労働組合運動も追い込まれ、部落解放運動も追い込まれていき、彼らの思うようなことが平然と行われる。社会党時代にはできなかったことが堂々と行われる。政治はそこから目に見えて大きな変化が行われている。こういう見方をしてほしい。その姿は、支持率はわずかも議席数が多く取れる仕掛けになっている。政治的に追い込まれる状況にもなり、事務所も追われ、名実ともに社会党が姿を消すことになる。

政治改革特別委員会に手を挙げたが党の方が入れてくれなかった。意見を言っていたのは、秋葉さんと香川の議員だけで、それも差し換えて賛成の議員を入れた。後に社会党議員が発言しなくなったということで、特別委員会に出てくれと言われた。

村山総理 その時には、細川内閣ではなく羽田内閣になり村山総理になっていた。

委員会では、村山総理に「法案を通そうとしているが、日本社会党を潰す法案に社会党の委員長として賛成するのか」と質問した。「日本社会党は第三極として生き残らなければならぬ」と言うので、「三極として生き残れるのか」と再質問した。しかし、生き残らねばならないと繰り返すだけであった。

現在、衆議院では社民党は二名だけ。自分たちのやり方がまずかったことを反省してこなかったことを反省してもらえばいい。個人的な恨みはないが大きな過ちを犯した。この観点から今の政局を見てもらいたい。

保守二党制 この前の総選挙でなぜ自公政権になったか？今の選挙制度では政権が変わりやすいが、支配階級の政党から支配階級の政党に移るだけ。どちらにしても経団連にしてみたら大きな痛みはない。それが政権が変わったから何かが変わると思うのは浅はかな考え。

TPP問題 民主党代表が進めようと思っていた時には安倍は少し違うことを言い、政権取ったら同じことを言う。聖域なき関税撤廃がなければ賛成する。オバマという話が出来たと言っていたが、日本の農業はめっちゃめっちゃに破壊される。

九六条問題。憲法改正は、衆参両院の三分の二となっているが：貴族院を排して衆議院と参議院になった。憲法の改正手続きを難しくするという憲法、硬性憲法にした。今度の憲法改悪で三分の二を取って、九六条を変えたいと思っている。はじめは九六条だけ変えて、ここ一番で九条を変えようと思っている。参議院の三分の二を自公に許してはならない。このようなことは、百年に一度しか巡ってこないから・何とかしなければならぬ。

自公が三分の二を取れなかったら三年間の時間が出来る。護憲勢力、運動が盛り上がる。そこで敵を追い込んでいく。政治は単独に存在していない。経財の仕組みに操られている。自民党でも民主党でも大きな変化はない。それが小選挙区比例代表並立制。

「レジスタンス」 資本主義はダメになったというのが次のモデルは見えない。安倍が、日銀に言ってどんどん紙幣を増刷している。信用組合等には回ってこない。広島県で中小の土木会社が六一件倒産した。安倍が間違っているのは何が原因で不況になっているのか分析できていない。どうやって自分の金を使わずに自分の儲けた収入に応じた生活にしようとみんなこう思っている。五時〜六時に行ったらスーパーの惣菜が少し安くなる。だから皆行く。安いものを狙うという事は、生活の実情から出てきている事ではあるが、大きな意味で、社会科学的に分析したら今の資本主義経済の仕組みに対するレジスタンス、抵抗だ。そこを考えなければいけない。

景気を支える六割五分から七割の力は国民の消費、購買力。企業が設備投資するのは一五%〜二〇%程度である。小泉政権以来、労働者を低賃金に追いやり、無権利状態にし、路頭に迷うようなことをして、国民の収入、働く者の収入がぐんと減った。その減った収入で一ヶ月何とか赤字にならないように生活しているのが国民の知恵。

それは、一種の今日の資本主義経済に対するレジスタンス。それを安倍はわからない。麻生も鳩山もわからない。金に困ったことがないからである。金に苦労してないものが働く大衆を抑え込むだけで、大企業が何とかやりくりしてくことが出来るようにしたのが小泉の構造改革。それを政治の場面であまり暴露されないようにするには、社会党のような労働者を基盤とする政党がおったら困る。だから社会党を潰した。

農村は疲弊した。孤独死が多い。利潤追求だけを目標とした、市場原理を第一とする政策ではもたない。規制緩和しなければいけないものもあるが、厳密の意味の労働者階級や勤労国民の立場に立った社会哲学をもって、その規制緩和の仕分けが必要だ。

提言 部落解放運動を通じて、少数者としての支配を何十年も運動で味わってきた立場の一人として、皆さんの取り組んでいる労働運動路線は、日本の労働運動からすれば少数精鋭。しかし、少数者はいつも追い詰められ、身につまされるからこそ、真剣にものを考えるチャンスに恵まれる。

ヘーゲルは「真理は常に少数者の意見から始まる」と言った。解放運動も胸を張ってやった。明日明後日というわけにいかないが日本の将来、世界規模における経済の仕組みに対して何らかの明かりを灯すことが出来るのではないかと思う。

自民大勝　しかし参院過半数に届かず

― 脱原発候補　東京で山本太郎氏当選 ―

参院選焦点の一つは、自民そして自民分派のみんな、維新が憲法改悪の発議条件である三分の二を超えるかどうかであった。衆院は憲法改悪へまず九六条からとする自民（二九五）、維新（五三）、みんな（一八）は三六六議席、衆院定数四八〇の七六％。参院で自民、みんな、維新が三分の二を超えるには、非改選は自民五〇、みんな一〇、維新一の六一、参院定数二四二の三分の二超は一六二となるから三党合わせ一〇一の議席が必要となる。改選議席二二一のなかである。

参院選に投げかけられた課題は①憲法、②TPP、③原発・エネルギー、④安倍の金融・財政・経済政策、⑤消費税、⑥社会保障、⑦労働者のくらしと労働のあり方等、日本の将来を根本的に問うものだった。安倍の金融・財政政策は独占資本が望み続けた政策だ。円安は大製造業の輸出をふやし、株価上昇は大金融業のぼろ儲けとなった。こんな中、「デフレ脱却への兆しが現れた」、そのうえで、「ねじれ解消」、「政治の安定こそが経済・日本再生の道」と、メディアとりわけ「読売」―は大宣伝、世論誘導にひた走った。「自民党を勝たせる」と、まさに選挙運動である。

昨年十二月衆院選、六月都議選の傾向がさらに勢いを増した。「自民圧勝（三四から六五）」、「民主惨敗」（四四から一七）、「共産、みんな躍進（三から八）」、「失速維新（二から八）」、「凋落社民（二から一）」、「消滅生活（六から〇）」、みどりの風（三から〇）」。参院での議席は自民一一五、民主五九、公明二〇、みんな一八、維新九、共産一一、社民三、生活二、この議席構造は何を示すか。

第一、自民党は単独過半数一二二に七つ足りなかった。公明と合わせ一三五。第二、憲法改悪への条件づくりは足止めをくった。自民、みんな、維新の議席は一四四、三分の二の一六二に一八足りない。この二つはこれからの政治を考えるうえで重要だ。自公連立・蜜月は一九九八年小渕政権からだ。この間自民は公明八百万の生き血を吸い体力を回復、公明は大魚に群がる小判鯨のごとく、権力のおこぼれでしぶとく生き続ける。この両党は支持基盤を根本的に異にする。自民は大独占資本、公明は小零細企業者、貧乏人。公明は宗教団体創価学会の党。「平和」は党存続の柱となる。安倍自民党と公明党との根本矛盾である。

憲法九六条改悪に不足する一八議席をめぐっても矛盾は起きる。読売は民主に手をつき込んでいる。民主執行部は「リベラル保守」を希求する。それに対し「戦犯三人衆」は「保守」。政党再編の動きが始まるとすれば、こんな所からと思われる。われわれの課題は、こんななか憲法改悪勢力の膨張にどう戦線をつくり上げるか。東京で脱原発を訴えた山本太郎氏が当選した。山本氏は「今がスタート地点、万歳している場合じゃない。これからが茨の道。つぶそうという勢力しかなく、味方は有権者、一人じゃない」と抱負を語る。志やよしである。

参院選と同日、五つの首長選がおこなわれ、飯能（埼玉）、三好（徳島）、曾於（鹿児島）、奈良で山本氏のような候補が自・公推せんを破った。地域からの主体性強化が未来を開く。

（編集部）

事業は拡大、表情に自信と明るさ

―「元国労闘争団を訪ねる旅」― 弥次喜多道中（一）―

いざ出発

この度は、縁あってまさに「弥次喜多道中（やじきたどうちゅう）」男同士の気楽な二人旅をすることとなりました。向かう先は、数十年ぶりの北の大地、北海道（旭川・名寄・音威子府）。東京という人混みと、時間管理された窮屈な日常生活から、ひとときのやすらぎを求めて、二泊三日の旅にいざ出発。

一三時三〇分待ち合わせ。北ウイング羽田第一ターミナルに時刻どおり現れた旅慣れた滝野さんと不慣れな、明けで少々眠い小生、無事に落ち合う事が出来ました。

旅は、人と人との出会いがあり、そこに「思い出のアルバム」が刻まれ、過去を振り返るときに、「懐かしさ」を感じることが出来ます。旅の最初の出会いは、元国鉄闘争共闘会議の内田さん（旭川闘争団）、羽田出発ロビーで、たまたま私たちの横に座った方がそうでした。「ひよっとして内田さんでは」、「滝野さん」と、会話がすすみ旭川空港までの同乗となりました。

機内はJALの客室乗務員、ふとJALの乗務員解雇撤回を闘っている鈴木さんを出す。多くの犠牲者（解雇者）を出しての飛行、「滝野さんこんな重い機体がよく大空を飛んでいるよね」「新幹線だつて超スピードでよく脱線しないで走っている」、二人そろって何ともいえない会話です。興奮しているのか、明けなのに眠気がこない。そうこうしているうちに北の大地が見えてきました。

菅原須磨子さん

客室乗務員の案内放送通り、一六時四五分定刻に旭川空港到着、到着ロビーには、懐かしい方のお迎えを受けました。菅原須磨子さんです。国労本部の書記として長年活動され、ご家庭の事情で旭川に活動拠点を置きながら今なお活躍されています。

小生の顔を見て、「愛わらないね」と須磨子さん。そうおっしゃる須磨子さんも年齢を感じさせない元気さ。（少し眼鏡の度数が強くなったかな）

旭川空港で内田さんとはお別れして、須磨子さんのマイカーで市内までドライブ、「空港は牧畜の匂いがしてたけね」「近郊に牧場があるからね」「あれがラベンダーの花、まだ早いからつぼみだね。明日は富良野まで連れて行ってくれるから見られると思うけど少し早いね」「残念、少し早かったか青紫のつぼみだね」、会話がすすむ。車は農道を通って須磨子さん推薦の「居酒屋」へ。

「迷い子」

一日目の「語らいの場」は、「居酒屋」、「早々に弥次喜多道中だね」と滝野さん。須磨子さんの車から降りた二人、ご案内頂いたとおりに知らない道を左折して「居酒屋」探すも見つからない。「どこだろう。名前何だったかな」。二人とも「迷子」、「ここを動かないほうがいいかも」と待つ事数十分、須磨子さん「ごめん、ごめん、左で

なく右だった」と笑いながら迎えに来てくれました。

「居酒屋」では、懐かしい「夫婦も同席していただきました。東ドイツ崩壊前に「DR友好協会反核・平和交流団」で小生と団で一緒にしました森山恵子さんです。ご主人の雪洲さんも同席いただきました。本当久しぶりの出会いです。少々時が過ぎても恵子さんの社会に対する厳しい目線は健在です。元北教組の戦士、八〇歳を過ぎた雪洲さんからは北教組時代の経験談を聞かせていただきました。

冷酒をたしなみながら、昔話に酔いしれて、珍しい「細竹の竹の子焼」、「行者にんにく」、それに「ホヤの刺身」などを美味しく食べる事が出来ました。

森山ご夫婦、滝野さんとは初対面、須磨子さんから「社会通信」の内容も含めての紹介。この席で「社会通信」をお取りいただくことが決まりました。一部拡大です。楽しいひとときは早く過ぎるものです。本日のお別れです。おやすみなさい。我々は旭川駅前の宿泊ホテルへ直行です。

国鉄分割民営化、今TPP

二日目の朝、今日の道案内は、音威子府（おといねっぶ）元国労闘争団の杉山均さんです。またまた「弥次喜多道中」、とにかくレンタカーを二人で借りにいき、杉山さんを待つこと数分、杉山さんから「わたしの車で行きましょう。レンタカー返ししましょう。」となり、折り返し、レンタカーを返しに。「すいません。車いらなくなりましたので返しにきました。」驚く女性社員、笑顔で了承していただきました。

不慣れな北海道の道、恐怖心がありありの小生、レンタカー返して、気持ちには晴々、助手席に陣取り車窓からの景色を楽しむこととしました。向かう先は富良野（音威子府とは逆方向、旭川から五九キロ先）いざ出陣。

車窓からの景色に一喜一憂（雄大な土地に植えられた、じゃがいも、たまねぎ、そば、とうもろこし等、見るものの心を豊かにしてくれます。この農家がTPP導入でどのくらい維持できるか、国鉄分割民営化で町を破壊し、今度はTPPで農村を破壊する。これでいいのか今の日本と叫びたくなる）。しかし、人ごみの中で生活し、秒単位で管理されている現実から、この時だけは開放された「人間に返った」気持ちになりました。

「北海道に来た」

北海道の高速道路は「片道一車線」に驚き、道路脇に矢印の棒が街灯のように繋がっている。「これは何の矢印ですか」「スノーポールです。雪が積もると道路の幅が（端）わからなくなるので」「なるほど」と一人勝手に感心してしまいました。北海道と言えば牧場と思い込んでいた小生でしたが、牧場よりも畑の広さに驚かされました。

車は富良野市内に入り、観光地「拾って来た家」に到着。倉本聡監督「北の国から」のロケ地です。入場料三〇〇円で使用された建物の中を見学することができます。早々に記念写真を撮り、一部屋一部屋見学して回りました。「冬は厳しい寒さのなかでの撮影だっただろうな」と、「北の国から」を想いだしながら感心してしまいました。

ちようど昼時、杉山さんの案内で、富良野と言ったら「富良野オムカレー」、町お

こしの一品、「富良野オムカレーはとことん富良野にこだわっています」のキャチフレーズ（カレーの上にオムレツがのっている）。一緒に出てきた牛乳とアイスクリームがなんとも美味しく感じられました。

その後、ワイン工場を見学して、車は大草原へ、「ルビナス咲く、ケンとメリーの木の丘」、最高です。「壮大・雄大・壮観」まさに言葉の通り、時を忘れて開放感に浸れること間違いなし。「北海道に来たく」と叫んでしまいました。

一休みしてから、車は音威子府（おといねっぶ）まで休憩なく走り続け、二日目の宿泊地「天塩川温泉」に到着。走行距離二二八キロを一人で運転していただきました。杉山さんありがとうございました。お疲れ様でした。

学習交流会

「音威子府は北海道北部内陸の原生林に囲まれた小さな村である。村の中央を天塩川（てしおがわ）が流れ、その川岸に天塩川温泉がある。開湯は九〇年ほど前、昔は飲用薬『常磐（ときわ）鉱泉』として珍重されていた。現在は宿泊ができるりっぱな村営温泉になっている。温泉の付近にはほとんど人は住んでいない。」と紹介されています。

観光気分はここまで。「温泉」に浸かり気分を一転、本日の受け入れ先、おといねっぶユニオン、音威子府地区労、新社会党音威子府支部共催の「学習交流会」に参加です。地区労傘下の組合員三〇人が参加していただきました。元闘争団員の関野さんの司会です。滝野さんから「今日の情勢をどう見るか」について問題提起があり、その後、「JR職場のパワーハラスメントと労働者の実態」について報告させていただきました。

交流は「ジンギスカン」の鍋を囲んで、生ビールを飲みながら、自治労、郵政、NPO法人おといねっぶ、関東から家族で転居してこられた方、村議会議員など、一人ひとりの方々から近況報告をいただきながら、和気あいあいの中ですすめられ、楽しいひと時は過ぎていきました。

元闘争団の方々が中心となり、地区労運動を守りながら、働くものの集まりを大切に活動されていることを肌で感じました。また、二〇代の女性、男性の参加の多かったことには驚かされました。若者の労働組合なれが悲観されている現社会の中で、音威子府の若者に将来性を感じる事が出来ました。（蓑輪 泰臣・つづく）

◇読者からのおたより◇

稲村論文 暑中お見舞い申し上げます（お見舞い一万円）。先の稲村論文、久しぶりに「向坂」に出会った感じです。『構造改革論―紹介と批判』（一九六一年刊）を探し出してきました。「演繹的」仮説には「帰納的」反証を、それが「科学的」なのでしょう。（神奈川・H）
編集部より 稲村論文、反響がありました。今号では一人の方の論稿を紹介しました。科学的社会主義を考え続けてゆく素材になればと考えています。

JPNネット大阪 昨年四月二十九日「正規・非正規」を中心にJPNネット大阪なる交流会組織を立ち上げました。大阪で会員三〇〇名を超え、いまそこで事務局長として活動をやっています。二ヶ月一回発行の通信を送ります。参考にして下さい。連日暑い日が続いています。お身体には十分気を

つけて頑張つて下さい。またお会いできる日でもあれば楽しみにしています。(尼崎・K)
編集部より ニュースありがとうございました。今のJ Pの実態、本場にすぎまじい。それが実
に良くわかります。知り合いの局長さん、J Pの労務管理、経営手法に怒つてる。郵政労働者、
かならず「全通」路線に立ち帰りますよ。兵庫いつでもうかがいます。

育成中 少しずつですが、若い活動家を育てております。今しばらくお待ち下さい。(千葉・O)

編集部より いかがりしているかなと心配しております。心配するだけで連絡もしない私の方が
悪いのですが、おたよりに元氣もらいました。楽しみにしています。

残金カンパ 遅くなり申しわけありません。残金カンパでお願いします。(帯広・S)

編集部より カンパに感謝。六月末久しぶりに友人と「北の大地」へ。旭川―富良野―音威子府
―名寄―旭川の旅でした。来年は稚内、そして紋別―美幌―北見―帯広へ行きたい。

地域に根づく 先日は当地に足を運んで頂き、ありがとうございます。限られた時間で十分なご
案内とも行きませんでした。私たちが今、力を合わせて前に向かって進んでいる事を体感してい
ただけたら幸いです。二四年のご支援に込めるためにも地域に根づき歩んでまいります。

(名寄・佐久間誠)

編集部より 皆さんの元氣な顔がみられ本当に嬉しかった。どうしていらつしやるかと、案じて
おりました。案じるよりも行くことですね。回りの仲間に勧めます。

講演会 最近、瀬戸内寂聴さん、家田壮子さんの講演会が、岩手県と福山市であり参加することが
できました。お二人の生き方には似通った部分もたくさんありますが、それぞれの位置で活躍して
おられます。たった一時間余りの講演会ですので、想いのほんの一部しかお聞きすることができま
せんでしたが、たくさんのことを学ばせていただきました。今はお二人の著書にはまっています。

(広島県福山市議・西本 章)

編集部より 私どもは岩手県出身のT女史におおられ、石川啄木などにはまっています。

闘い三十年 さいたま新都心は様変わり、日赤病院などが移転予定で土地の再生砕石撤去作業時の
アスベスト公害が心配されています。日本エタニットパイプとの闘いは三十年余り、
現在の闘いは東京総行動ホームページ <http://tokyo-sokodo.org/> をご覧ください。

「エタニット史上最大のアスベスト訴訟」日本語版(税込二千円)には世界のエタニット、日本エ
タニットとの闘いが掲載されており、ぜひ一読ご支援ください。(注文先 FAX 048-767
-3635 日本エタニットパイプ分会)。資本の利潤追求を健康、生命に優先させてはならず！
反アスベスト・反原発・反T P P・反失業・反消費税・平和憲法が危機の参院選となっています。
改憲ノーと頑張ります。(埼玉・M)

編集部より 闘い三十年余、たしかN T Tの木下闘争もそうですね。

感想そして目標 最近の私の感想をいくつか。①役員を降りて煩わしいことから解放され、時間は
できたのですが、議論する機会が減り、職場の性情もあつて組合の情報がほとんど入らなくなつて
しまったこと。さらに、職場が変わったこともあつて、若い人たちとの接触がなくなり、J R職場
の生々しい雰囲気は伝わらなくなったことが、多分ニュースにも影響が出てくるのではないかと危
惧しています。全体の情勢は伝えたいと思いつつ、職場の雰囲気になじむニュースにしなればと
思っていますので、忌憚のない御意見を下さい。②昨年の全国大会でも少し言いかけたことですが、
国労の闘いの基調をどうするか、という問題です。組織拡大がメインでは逆立ちもいいたくありません。
反合研ニュースにもあるような、資本と労働のせめぎ合い、さらには政治の反動化(原発・軍事大国化・憲
法改悪)といかに闘うかです。口先だけで「闘う」のではなく、具体的な行動・組織作りが問われ
ていると思います。職場では、労働組合の役割は何なのか具体的に問われます。社員間の競争に
どう対処するのか、会社・管理者の職場支配をいかに排除していくのか、社員の働きすぎをいかに
問題にしていくのか、ここの討論が反合研も含めてまったく不足していると思います。私は、今の
時代に合うような「職場闘争の手引き」くらいを皆の議論で作りたい気持ちです。(国労・U)

編集部より 「職場闘争の手引き」期待。J R総連、J R連合に問題意識はありません。

三好市長選挙 昨日(七月二〇日)まで公共工事談合汚職に絡んだ、前市長の突然の辞任で、徳島県
三好市長選挙。この選挙に黒川県議会議員が決意。土建業者、地元衆議院議員などの保守勢力が擁
立した候補との激しい選挙戦へ。争点は、ほとんどの市民が望んでいない音楽ホール建設(建設費
四〇億円、毎年の維持費一億円)の賛否です。私もいってもたつてもいられず、昨日まで手伝いに。
結果は参議院議員選挙と同じで今日の投票で決まります。

(高知・N)

編集部より 当選あめでどう。自民候補をやぶつた。地域から政治再建です。